

---

# 闇の歌姫

ナベリウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の歌姫

### 【Nコード】

N0085BA

### 【作者名】

ナベリウス

### 【あらすじ】

人より外見が少し変わっているからというだけで迫害を受けていた少女がひょんなことから異世界にきてしまっただけで魔物の中でも1位、2位を表すほど強いとされているドラゴンと出会い保護される。

それから少女は人としてかけてしまった感情を取り戻していくお話です。

処女作ですので何か不快に思うことも多々あることと思いますがそこはご了承していただきたいと思います。

## 第1話 プロローグ

私はいつ頃からここにいるのだろうか？ 思いだせない。

「おい！ 見ろよ！ あそこにいるのバケモノじゃないか？」

「本当だ！ バケモノだ！ おいこっちくんなよバケモノ！」

どうしてみんな私のことをバケモノっていうんだろう？ 私何もしてないのに。

「っ！」

1人の男の子が投げた石がちょうど私の頭に当たった。

「当たった当たった！」

男の子たちはそれを見て笑っている。私は感情のない目で男の子たちを見た。

「なんだよその目は！ バケモノのおまえがいけないんだろ?!」

そう男の子たちは私に言って去って行った。どうして？ 私何もしてない。しようとも思はない。なのにどうしてわかってくれないの？ どうして私を見てくれないの？ もういや!! みんな・・・みんななく・・・

っガバ!!

「ハアハアハア・・・ゆ・・・め・・・?」

夢なんて久しぶりに見た。いつもはそんな夢見ないのに。急にどうしてこんな夢見たんだろう？

気分が落ちてきた！ こういうときは歌うのに限る！

「~~~~~」

30分、1時間くらい歌ったところで満足した私はまだ寝室にいることに気付いて慌てて寝室から出る扉まで向かってあげた。

だがそこに広がっていたのはいつも見ていた廊下ではなく森の中だった。

「は・・・？ いやいやいやありえないって！ だってここ普通に家だったでしょ？！ 何？！ なんで？！」

私はテンパっていて後ろに誰か（？）がいることに気づかないでいた。

「・・・誰だ？」

私は急にかかった声に驚いて後ろを振り向くとそこにいたのは今まで物語の中ででした見たこともない生物がいて目を見開いた。

## 第1話 プロローグ（後書き）

主人公は迫害を受けていましたが明るい性格の持ち主です。  
まあそこはお気になさらず！

## 第2話 異世界にきちゃった(前書き)

前回は以外にも短かったなので今回は長めにしたと思います。

## 第2話 異世界にきちゃった

私は目を見開いたまま相手を見た。

大きな体に人間を簡単に飲み込んでしまえそうなほど大きな口。そこから納まりきらないほどの鋭くとがった牙。それから何もおも貫かんとする堅そうな真つ黒な鱗。

どこからどう見ても物語上でしか存在できないはずのドラゴンがそこにはいた。

『もう一度問おう。貴様はどこからきてどうやってこの森に入った？』

え・・・？ええええええ！！も、もしかして今ドラゴンが喋ったの？！ドラゴンって喋れるの？！喋れないよね？！私の知っているドラゴンは喋れなかったよ？！って知ってるって言っても物語上のってことだけど・・・

私がテンパっている間に返答がなかったのを答えないと取ったのか機嫌が悪くなっていくドラゴン。グルルウと呻り始めた。

私は急いで答えようとしたが自分の今置かれている状況をいまいち理解していないためかなんと答えていいのかわからない。とりあえずは何か答えないと・・・

「え、えつと・・・ここは・・・どこ・・・なんでしょうか・・・？」

『何？貴様はここがどこだかもわからずに踏み込んだというのか？』  
表情まではわからないけどどこか呆れを含んだ声だった。

『ここはアスファラ大陸に存在する禁忌の森だ。』

呆れながらも説明してくれた言葉に私は絶句した。

アスファラ大陸ってどこ？禁忌の森？も、もしかして・・・いやいやいやそんなこと絶対あり得ない！だってそれは小説の中だけのことだし実際にあったことだなんて聞いたこともないもの！でもそうだとすれば今の状況がすべてつじつまがあう。

「私・・・異世界にきちちゃった・・・？」

私がぼそつとこぼした言葉を聞いたのかドラゴンは驚愕(?)した。

『まさか・・・とは思っておったが本当だったとは・・・この世界ではまずこの森には人間は絶対に足を踏み込まん・・・ふむ・・・貴様名はなんという？』

少し考えたかと思うと急に名前を聞いてきた。私は本当の名前を名乗っていいのかわからなかったがどうしてか目の前にいるドラゴンは信じられた。

「私の名前は鈴原美羽。えっと・・・あなたのお名前も聞いてもいいですか？」

目の前にいるドラゴンはまさか自分も名前を聞かれるとは思ってなかったのか少し目を見開いていた。だがそれもすぐにおさめて言っ

た。

『我の名は本当は人間には教えたくないのだが・・・ふむ、ミウと言ったか、お主に興味がわいた。我の名はアスターク。ミウ、異世界からきたと言っていたが行くところはあるのか？ないのならば我と一緒にくるといい。』

私はドラゴン、アスタークの言葉に驚愕した。私を見た人は避けるか無視するか罵ってくるかのどれかだったからだ。

私が驚愕しているとアスタークは不思議なものでも見るかのような視線を私に送ってきた。

『なんだ？行くところがあるのか？』

私はその声に我に返って言った。

「え？私と一緒にいてくれるの？私と家族になつてくれるの？」

つてうわああああ私何言っちゃってるの?!ばかあああああ!!  
!何ドラゴンに向かつて「家族になつてくれるの?」っておかしいでしょ!!絶対私おかしい子になっちゃってるよ〜ど、どうしよ・

『なんだ？ミウは家族がほしいのか？なら良い。我とともに暮らすのだ。好きなようにするといい。』

う・・・そ・・・ずっと、ずっと欲しかった家族になつてくれるって・・・どうしよす〜いうれしい!!

私は気がついたらアスタークに向かって笑顔を向けていた。

## 第2話 異世界にきちゃった(後書き)

はい！無理やり2人(?)の出会いを締めくくらせていただきまし  
た！

ほんと無理やりで申し訳ないです。想像力がほしい・・・  
なんで？とかは思つかも知れませんがお許しください！  
想像力&文才がないんです；；；  
ま、まあーとりあえずお付き合いありがとうございました。

### 第3話 旅立ち（前書き）

アスタークは実際人間の言葉をしゃべることはできませんが主人公は言っていなかったですが前の世界で動物の言葉がわかっていたのでそれを知ったアスタークはいまでは魔物の言葉で会話しています。

### 第3話 旅立ち

私とアスタークが家族になって半年がたった。

最初のうちはサバイバルになれていなくて苦労したけど半年たった今では慣れたもので苦労はまだ少し残るけどアスタークという家族がいるから幸せに暮らしている。

そういえば最初アスタークの家に行った時はびっくりした。だってアスターク、女性で子供がいたんだもの！　じゃべり方からして男性だと思ってたから余計びっくりしちゃった。アスタークは『人間みたいに雄だ雌だという感覚は我等にはない』だそうです！　種族が違うだけでこうも考え方が違うのだと思い知らされた時でもあった。

そしてなんと！　アスタークはこの世界で1位、2位を争うほど強いんだって！　それでアスタークより強い魔物って誰？　って聞いたら『この大陸にはいないが他の大陸にフェンリルがいる』んだって！　ぜひ機会があったら会ってみたいな

そして今現在、私が何をやっているかというアスタークとヨアン（アスタークの子供）に歌を披露します！　なんでか一回口ずさんでいたみたいでそれを聞いたヨアンが気に言って毎日毎日歌ってと言われてたので今では日課になった。

『うむ、いつ聞いてもきれいな歌声だ。ずっと聞いていても飽きぬな』

『うん！　きれーなの！　ミウの歌はキレーー！』

歌い終わった私に2頭は言った。いつも歌い終わった後に言ってくれる言葉で聞きなれているけどやっぱり言われるとうれしいものだ。

「ありがとう。前は自己満足で歌ってたけど聞いてくれる人がいるだけでこんなにも違うものなんだね。」

私は心からの笑顔を2頭向けた。それを眩しいものでも見るかのように目を細めたアスタークが言った。

『ミウよ、話がある。』

私はいつもは聞かない真剣な声にいやな予感がしながらも頷いた。

『ミウよ、我はおまえに世界を見てもらいたいと思っておる。』

言われた私は最初言っている意味がわからなくて啞然としてしまったが徐々に自分の中にアスタークの言った言葉がしみ込んできて気づいたら叫んでいた。

「どうして?! 私・・・私このままでいい!! ここにいたい!!」

私は今にも泣き出しそうな顔をしてアスタークに訴えた。

『・・・我はおまえをいじめたいわけではない。ただ短い人生をこんなところで歩んでほしくはないのだ。我らと違って人の子はあつという間にその人生を終わらせてしまふ。その前におまえには世界を見てほしいと我は思っておるのだ。』

その言葉を聞いた私はここまで自分のことを考えていてくれていたなんて思わなかった。初めて会った時は無理やり家族になってしまつて迷惑をかけていると思つていたから余計に今の言葉は私の心に響いて目から涙がこぼれてしまった。

「でも……でも私見た目がこんなだし……誰も受け入れてくれなかったらつて思うと怖い……」

そこまで言うとアスタークは短いため息をもらした。

『何を言つておる。おまえはこの森から出たことがないからこの世界の人間を見たことがないからわからんだろがこの世界からしたらお主の銀の髪に赤い瞳はなんら不思議ではないぞ』

嘘……だつて銀の髪に赤い瞳だよ?! この外見がなんら不思議じゃないつて……他の人はどんな感じなの?! ちょ、ちよつと興味がわいたかも……だけどここまでお世話になつて迷惑までかけたのに興味がわいたからつて出て行くのはどうなんだろう……。

『クツクツクツク……お主はすぐに顔に出るな。そう不安な顔をするな。おまえは私の娘だ。偽りはない。親にとつて子には旅をさせたいものだ。興味があるのであれば行つてくるといい。そして帰りたくなつたら帰つておいで。待つているから』

アスタークはやさしい声で私に言った。涙が止まらないまま私は何度も何度も頭を縦に振つた。それを見ていたアスタークは私のところにまで来てくれてやさしく壊れ物を扱つかのように頬につつた涙をなめてくれた。

『もう泣くな。我はどうしたら良いのかわからぬ。』

苦笑い混じりに言われたので私は笑顔になつて答えた。

「私この世界を見てみたい！ 人に触れてみたい！ ごめんなさい・  
・拾つてもらつて恩もまだ返せていないのに・・・」

『おまえが謝ることはないよ。我が先に言いだしたこと・・・行つ  
ておいで我とヨアンはここで帰ってくるのを待っているから』

私はその言葉に胸が熱くなるのを感じて何度も何度もありがとつ  
て口にした。

翌日私はアスタークと一緒に森の出口まで来ていた。

「じゃあ・・・行ってくるね！」

『ああ・・・行つておいで。』

私はやさしい言葉をもらつてアスタークに教えてもらった近くにあ  
る村まで歩いた。

### 第3話 旅立ち（後書き）

っていうことで今回はミウが森の外に出るまでの話を載せました。  
ええ！ミウちゃん、もう一度人とかかわってみようと決断をくだし  
ました！

そしてヨアンが空気になっていた件ですが気にしたらだめです！（  
笑）

## 第4話 家族との再会

あれ？そういえば不思議だったんだけどどうしてアスタークは旅に必要な物一式もっていたんだろう？後、時々違う服もあったし・・・まあ〜いつか！今は旅を楽しもう！って言っても一晩野宿して順調に歩いて行けば村に着くって言うてたし大丈夫よね！

「それにしてもこの世界にきて1人になるのは初めてかも・・・ちよつと不安かも・・・いやいやいやだめよ！！今からこんなんじやこれから先やっていけない！がんばるのよ私！！」

と自分に喝を入れているときだった。遠くのほうに2匹はありそうなる3匹の狼（？）に襲われている馬車を見つけた。

どうしよ・・・一応アスタークからは自分の身は守れる程度は戦い方を教えてもらったけど人を守るってなると不安かも・・・

そんなことを考えていたせいで狼（？）に見つかってしまった私はパニックになりながらもどう切り抜けようか考えていた。

急に目の前が暗くなったのでハッ！って我に返った時は遅すぎた。

・・・あれ？

『久しぶりだな〜ミウ・・・元気にしてたか？』

その声には聞きおぼえがあった。2ヶ月前まで私が歌っている時に聞きに来てくれていた・・・

「・・・レクイ・・・？」

私がそういうとうれしいかったのか左の口角を上げた。相変わらず器用なことができるのね・・・時々人間みたいって思うときあるし。

「レクイ、今まで何してたの！！いつも来てくれていたから二ヶ月？くらい前からこなくなつて・・・すごく心配したんだから！！」

涙目になつて上を向きながら言うと少し困つたような顔をして言った。

「悪かつた。だが仕方のないことだつたのだ。急にフェンリル様に呼ばれてな行かなければいけなかつたのだ。」

「ふうくん・・・ってフェンリル様？！フェンリル様に会えたの？！」

私がそういうとレクイはうれしそうに言った。

「ああ、会つたぞ！ フェンリル様もおまえに会いたがつていた」

フェンリル様が私に会いたがつている・・・？なんで？まあー会えることには変わりないからいいけどでもなんでだろ？

私が相当不思議な顔をしていたのかレクイが話してくれた。

「実はフェンリル様におまえの歌声が素晴らしいとポロつと言つてしまつたのだ。そこで興味を持つてしまつて会いたがつているのだ。今回呼ばれたのもその件だつたなあー」

となぜかしみじみしながら言った。これは喜んでいいのか呆れるべきなのか……ってそれどころじゃなかった！

「それは少しの間おいといて、何やってるの！！馬車を襲うなんて！」

と憤怒しながら言うとレクイは困ったように言った。

『最初に襲ってきたのはあの人間どもだ。我らが襲う、とでも思ったのだろう、我は早く帰りたいから無視しようと思ったのだがあいつらが……』

レクイは最初のほうは困ったような声だったけど最後のほうは呆れ声になって視線を馬車のほうに向けた。私もつられて見る。他の2匹はレクイの子分なだけど考えが足りないというか知識が足りないと言ったほうがいいのか……いい子たちではあるんだけどレクイがらみになると手がつけられないのよね。

など私がまた思考にとらわれているとレクイがそういえば、とってきたのでまたレクイに視線を戻した。

『どうしてお前がここにいるのだ？森からはここから結構離れているだろう？』

「あ！それはねアスタークが私の人生は短いか今のうちに楽しんで来いって言って旅にささせてくれたの！」

私がそういふとなるほどつと言いたげな顔をした。

『そうか・・・確かここから近い所は王都、アトラスだったな。もしかしておまえ歩いて行く気だったのか？早くても2日はかかるぞ。』

呆れたようなびっくりしたようなそんな感じの声だった。だって歩くしか移動手段ないし・・・などなど思っている顔に出ているのかレクイがため息交じりに言ってきた。

『王都の近くまでなら乗せて行ってやる』

その言葉に最初びっくりしたけどうれしさが込み上げてきて抱きついた。

「ありがとう〜レクイ！今度お礼するね！」

それで話は終わったとでも言うかのようにレクイはまだ馬車を襲っている2匹に向かって遠吠えをした。それから数分もたたないうちに2匹が私たちの元まで来た。

『兄貴〜呼んだ？』

『呼んだ？』

という2匹に今までのことを話し先に森に帰るように言った。最初レクイから離れるのを嫌がっていた2匹だったがレクイが一睨みしたことで2匹は森あるだろう方向に向かって走って行った。

『まったくあいつらは・・・んじゃ行くか？』

私がコクリと頷いたのを見て乗りやすいようにとしゃがんでくれた。

それに風魔法を自分にかけてふわりと浮かんだあとレクイの首元まで行って降りた。それを確認したレクイは私が振り落とされないようにと気遣いながら走りだした。

王都かあゝ最初に行く私以外の人がいる場所・・・少し緊張するけど大丈夫！だってアスタークが言っていたもん。おまえをいじめるやつはいないって。だから大丈夫！今だってレクイがいる。

しばらくして自分がうれしさのあまり馬車の存在を忘れていたことに気づいて沈んだという話はまた今度つというこで。

#### 第4話 家族との再会（後書き）

はい。魔法の存在を書くのを忘れていました。  
ありますよ！魔法！

次こそ王都の話に入ります！

## 第5話 王都に到着（前書き）

更新遅くなつてすみませんでした。

こんな小説にお付き合ひいただきありがとうございます！

## 第5話 王都に到着

出発してから半日で王都の近くまで着いた。

『ここからしばらく歩くと王都の門が見えてくる。ここままで行ってもいいが面倒だからな・・・このままいけば・・・な・・・』

「何？その含みのある言い方。他にも方法があるの？」

不思議に思って聞いてみる。するとレクイはニヤリと笑って答えた。

『ん？あるぞ。おまえも知らないことがな・・・』

い、いったい何？！何があるって言うんだろう？私が眉間に皺を寄せて呻っているとレクイは声を出して笑った。

『くつくつく・・・ほんとにおまえを見ていると飽きない。・・・答えは俺が人間の体になればいいんだ。』

一瞬何事もないかのように言うから聞き逃すところだった。人間の体になる？！

「そんなこと可能なの？！」

少し声を上げて言うとまた笑い出した。私がムスツとしていると『悪かった。』と言って話し出した。

『俺ら上位にいる魔物になれば人の擬態をとることは可能になる。』

だがいつも以上に魔力がなくなるがな。まあ俺なら1日くらいど  
うってことはないだろう。』

へえ、魔物にもやっぱり位とかつてあるんだね・・・そんな的外れ  
なことを考えていると一瞬光ったかと思っただら目の前にいたのはま  
だ10代後半くらいで黒い髪に金の目、整っている顔立ちだけどど  
こか近寄りがたい雰囲気さらしだしている青年がそこには立って  
いた。

「どなたですか?!」

思わず聞いてしまった。私は悪くない!こんなにかっこいいなんて  
聞いてないもん!!

「おまえは・・・はあ、もういい。俺だ。レクイだ。」

目の前にいる青年は何か言いたそうにしたが次の瞬間には諦めたよ  
うな表情をして言った。

「や、やっぱりレクイなんだね・・・っていうかレクイ何歳なの?」

私が驚いた感じで聞いた。

「俺は・・・128歳だ。魔物の中では若い方だな。」

ひゃ、ひゃくにじゅうはっさい?!住む世界が違うだけでこうも寿  
命までもが違うなんて・・・異世界&魔物・・・恐るべし!!

など馬鹿なことを考えているとレクイが歩き始めた。

「このままじゃ夜になる。行くぞ。」

と前を向きながら言った。私はそれもそうだなって思っておとなしく着いていくことにした。

第5話 王都に到着（後書き）

ええ！今回は短いです！ごめんなさい……許してください！

次回は長めにしますのでww

## 第6話 町におでかけ

レクイと一緒に歩きながらキョロキョロしていると手を握られた。びっくりしてレクイを見ると

「迷子になりかねん。後転びそうだ」

など保護者全開で言われました！ええ！私は子供ですか！！ムスっとなつているとレクイが立ち止った。

「ここだな。入るぞ」

そう言つてすたすたと入つて行つた。もう少し外見見たかったのに・・・私は店員さんとレクイが話し始めたのを見た後周りを見ることにした。

周りは意外ときれいで掃除が行き届いてる。カウンターの右隣を見ると通路があつてそこからおいしそうな匂いがするからきつと食堂ね！そして左側を見ると部屋が通路の両方にあるからきつと部屋か・・・など考えていると店員さんと会話を終えたレクイが戻ってきた。

「・・・もつと落ち着きというものを身につける。はあ・・・まったく」

ええええ落ち着きがなくてすみませんねーだ！私は頬を膨らませてそつぽをむいた。それを見たレクイはやれやれと言いたげな表情をした後言つた。

「膨れてないで行くぞ。部屋はこつちだ。」

そう言いながら歩きだしたレクイの後ろを膨れながらも歩いた。

しばらく歩いて部屋を見つけたのかその中に入って行ったレクイを見て私も続いて入った。

「悪いな。部屋は1つだ。後は部屋がいっぱいなんだとさ。まあーベットもちょうど二つあるしいいだろ。」

「うん。別に? いいんじゃない?」

私がそつけなく返すとはあーと何度目かの深いため息が聞こえた。

「いい加減機嫌なおせ。どうしたら機嫌をなおしてくれる?」

ん〜どうしよっかな〜あ! そうだ! 私は思いついてレクイに向かって言った。

「今日はもう日が暮れちゃったから明日町を見に行きたい!」

私がそう言うとレクイは呆れた顔をしてくれたけど了承してくれた。私は満面の笑みをレクイに向けた。

あれから何事もないまま翌日!

私は起き上がって両開きの小窓に向かい勢いよく開けた。ん〜いい天気！これはもう神様が出けなさいって言っているのね！そう思い隣に目を向けた。

そこにはもう一つのベットがあつて人1人が入っている膨らみがあった。私は躊躇せずにそのベットに近づき勢いよく飛びついた。中からぐうって声が出たけどきにしない！

「起きて起きて！！朝だよ〜早く早く〜行こう！！」

私がそういって布団の中から不機嫌丸出しのレクイが出てきた。

「おまえは少しは自分の行動を考えてから行動しろ！！！」

ぶ〜ぶ〜そりゃー寝ているところ飛びついたのは悪かったけどそこまで不機嫌になることないのにー！そう思って頬を膨らませた。

「いいじゃん！楽しみだつたんだもん！」

私がそういうとレクイは起き上がってベットからでた。出るタイミングについてたけど・・・癖になっちゃったのかな？

レクイが聞いたなら速攻で否定しそうだ。そんなことを考えているうちに扉を出ていく後ろ姿を見て急いで追いかけた。

それから朝ご飯を食べて洋服をお出かけ用の服に着替えていざ出陣

！ん〜楽しみ！！それに誰かところして出かけるのも初めてだしね！

私は満面の笑みをレクイに向けて手をつなぎながら街に突撃した。

町にはいろいろなものがあつた。雑貨にレストラン、防具店に武器屋、後は喫茶店にお洋服屋さん！すごいすごいっばいある！！

私ははしゃぎながらレクイを引つ張つて行つた。するとレクイが根を上げ始めたので休憩することにした。

「落ち着きというものを買ってこい！！そして自分の辞書の中に書き込め！！」

「もぉーそんな怒んなくつたつていいじゃん〜血圧あがるよ？」

誰のせいだ！とブツブツ言い始めたレクイをほおつておいて頼んだ紅茶を飲んだ。それを見たのかばかばかしいとでも言いそうな表情でレクイも飲み始めた。

「ミウ、これからどうするのか考えているのか？」

「ん〜実はこれと言って何も考えてません。」

苦笑いをしながら下を向くと前のほうからため息が聞こえた。

「おまえのことだからそうだとは思っていた。とりあえず2〜3日はここに滞在する。1日では回りきれん！」

その言葉に顔を上げるとやさしい顔をしたレクイがそこにはいた。

「~~~~っ・・・大好き!!」

私がそう言いながら飛びつくんだから後先を考えろ~~~~っという絶叫が町中に響いたとか響いてないとか（笑）

## 第6話 町におでかけ（後書き）

そんなこんなで第6話終了です！

王子様・・・どこで出しましょう。

それとミウちゃん17歳ですよ？一応。子供っぽいのは仕方ないの  
ですよ・・・

許してやってください（笑）

## 第7話 思わぬ出会い

あれから無事(?)に買い物を終えて宿に戻ってきた。そして次の日の朝が今現在。

「レクイ〜昨日買った服、どう?これ今日着てこつと思っただけど・・・」

私ができる回る回りながら聞いた。今着ている服は薄いピンク色で足首まである長さのワンピースで体のラインにそっている。少し胸元が開くけどまあいいでしょ!

「ああ、いいんじゃないか?」

につこりしながら言ってくれた。でも破壊力抜群です。レクイ・・・昨日も笑っているとき周りにいた人たちが悲鳴をあげていたもの。でもそれに気づいていないところが鈍感なのかそうじゃないのか・・・

「うふふ〜ありがとう!」

くるくる回るのをやめてお礼を言う。

「んで?今日はどうするんだ?」

あ！全然決めてなかった・・・ん？どうしよ・・・明日この町を出たいしあまり長いしたら家に帰るのも遅くなっちゃう。なんてったって生きているうちに世界を回っていろいろな体験してそれをアスタークに話すのが私の夢なんだから！

私が一人もんもんと質問していないことまで考えているとレクイが予想だにもしなかった一言を発した。

「何もないんならちよつとここに友がいるのだ。会ってきてもいいか？」

え！？レクイ友達いるんだ・・・人間の友達・・・いや！！行かせたくない。一人になりたくない！！だけどそれよりも困らせたくない。だって最初は1人で行くはずだったんだもん。それに比べて数時間いなくなるだけ。何も寂しくなることもないし怖がることもない。大丈夫・・・大丈夫

「うん！わかった。でも1人は寂しいからレクイがいないときだけ町にいてもいい？」

レクイは何かあったらどうするんだって渋っていたけど最終的に何かあったら呼ぶっていうことで了承してくれた。

そしてレクイが出かけて行き私も町に出た。

「やっぱ一人だと全然面白くない・・・」

私少し膨れてながら歩いていると門が見えてきて外にでると森が見えたので入ってみるとそこには信じられない光景が広がっていた。

そこにあつたのは大きな池で水はとても澄んでいて底まで見えるほどだった。

「とてもきれい・・・水面がきらきらしてて幻想的・・・」

その光景を見た後私はいつの間にかに歌っていた。前の世界で一番好きだった曲。許しの歌。この歌を聞いているときや歌っているとき私は世界に許されたんだって・・・みんなにも許されているんだって思うことができた。

しばらくして最後の一節を歌い終わろうとしたときだった。パキッという音が聞こえてきて急いでその音が聞こえてきたほうを向くと濁りのないきれいな金の髪をぞんざいにひとくりにして後ろに流し、目は濃い緑色をしていて顔は人間とは思えないほど整っていてとても優しそうな私とそんな変わらなさそうな少年がそこにはいた。

私は目を見開いたまま固まってしまった。相手も固まったまま何も言わずにいる。

そのまま見つめあっていると先に我に返った私は来た道を走りながら戻った。後ろから声が聞こえたが相手にしている余裕が今の私にはない。

急いで町に戻り部屋に駆け込んだ。そこにはまだレクイは戻ってきていなかったことが幸いだった。そのままの勢いでベットの中にもぐりこんだ。

聞かれた・・・人間に、誰かもわからない人に聞かれた！！恥ずか

しい・・・それに人間は嫌い・・・だって私が歌うとみんな呪われるって言って逃げて行くんだもの。嫌い・・・アスタークやヨアン、レクイに他の魔物さんたちがいればいい。みんなやさしいから。

いつの間に寝ていたみたいでレクイに起こされた。

「どうした！！泣いてるじゃないか！！何があった？言うてみる。」

私はレクイの焦ったような心配したような顔と声を聞いてさっきはびっくりのほうに勝っていたけど今は熱いものがこみあげてきて泣いてしまった。泣いている間もレクイは頭を撫でてくれた。

しばらくたって落ち着いた私はレクイが出て言うてからのことを話した。

「町に出たのか？」

今まで聞いたこともない低く地を這うような声が聞こえた。

私はびくっとなって恐る恐る頷いた。

「何かあったらどうする？！悪い奴らなんてそこらじゅうにいるんだぞ！！少しは考えてから行動しろ！！」

いつもは呆れながら言われるそのセリフも今は怖い。

私がびくびくしながら謝ると「どなってすまなかつただが心配だったんだ。」とやさしい声で言われて引っ込んだはずの涙もまた出てきてしまった。そのあとは狂ったように謝り続けた。するとため息が聞こえてきてますます喉の奥が熱くなってきた。すると頭に重い

ものが乗った。すぐに手だとわかって顔を上げるといつものやさしい笑顔があつて飛びついた。レクイの胸の中でわんわんとないてそのまま寝てしまった。

「寝たか・・・時々大人っぽい顔をすると思えば何かをきっかけに子供みたいになる。ほんと目が離せないよ。」

そう言ったレクイの目はとてもやさしかった。

「さて、ミウがあつたという少年少し気になるな。ミウは知らなかったとは言えその少年はあそこが立ち入り禁止なのは知っているはず。まあ明日には出ていく予定だしもうここにもくる予定はない。気にしないでおくか」

そう言ってレクイはゆっくりとミウを抱きかかえてベットに寝かせ、ろうそくの火を消してレクイ自身も自分のベットに行くとなつて目をつぶった。

そして夜が明けていった。

## 第7話 思わぬ出会い（後書き）

どうでしたか？

さて、少年は誰だったんでしょうね？まあ勘のいい人もそうじゃない人もわかつちやいますよね（^―^；）

そして！できれば感想などください！くれた日には飛んで喜びます！字のごとく喜びます！

## 第8話 攫われる

朝起きて自分が泣き疲れて寝てしまったことを思い出して赤面している。隣のほうから何事もなかったかのように態度をとったレクイが話しかけてくれたことにホっとしてレクイが持ってきてくれた朝食を食べている。

「ミウ、昨日友人に会った後おまえのことだから旅の準備もしていないと思っっている。いろいろ用意しておいた。だから今日すぐにでも出られるぞ。」

「ほんと?!ごめんね、何もかも任せちゃって……」

「何をいまさら……それより何時に出るんだ?」

いまさらって何かな?!私が前から何もしていなかったみたいじゃん!と少しむくねながらも考えた。

「ん〜私こういうのわかんないからレクイに任せる!」

はい。レクイに丸投げしました。しかもそんな呆れたような顔しなくとも……

「はあ……わかった。俺の足でも次の町までは5日かかる。もう出れるか?」

そう聞かれた私は頷いた。

「そうか。ならもう出るぞ。用事がないのなら長居することもないからな。」

そのあとからは荷物をまとめて私は先に宿を出て外で待っていた。それにしてもなんなんだろう？行きかう人行きかう人全員が私を見てヒソヒソと話をしている。

私はわけがわからず困惑していると急に首の後ろに衝撃を感じて目の前が真っ暗になって前のめりに倒れそうになるところを男性がかえてそのまま闇の中へと消えていった。

しばらくして出てきたレクイはミウがいないことに気づいて探すが見つからず周りにいる人たちは知らずのうちに殺気を出しているレクイを見ておびえていた。

それからしばらくして私はどんどん意識が覚醒していくことに気づいて目を開けた。そこには肌触りの良いふつかふかの天窓付のベッドに寝ていることに気づいて起き上がって見てみるとみたこともない豪華な部屋にいた。

何々?!なんで私こんな豪華な部屋にいるの?!つかどこ?どこ?レクイ心配してるよね・・・早くここから抜け出さないと。

ベッドから出て急いで窓に近づき開けようとするがあかない。なんで?なんであかないの?!押しても引いても開かない。窓は諦めこの部屋で唯一廊下に出られるであろう扉に近づいた。

物音はしない。それに人がいる気配もしないし・・・私はために

ドアノブを握りひねってみた。すると以外にも軽い音を立てて開いた。これならいける！！勢いよく開け周りを確認すると誰もいなかった。

よし！ここから急いで出よう。そしてレクイとなんとかして合流しなきゃ・・・そうだ！

【レクイ！！】

私は魔力を使ってレクイに念話を飛ばした。するとすぐに返事が返ってきた。

【ミウか！！今おまえどこにいるんだ！！】

焦った声が帰ってきて私は少しうれしくなった。心配してくれる存在がいることに安心した。

【わからない・・・ここがどこでどうしてここにいるのか・・・】

私がそういうと考えているのか間が空いた。その間も私はなんとか出られないかと探していると階段を見つけた。急いでそこに向かい階段を駆け降りた。

【ミウ、魔力を飛ばしてくれないか？それをたどっていく。】

そう言われて私は初めて気づいた。そうか！魔力飛ばせばそれを追跡することができるだった！！どうしてこんな大事なことを忘れてたんだろう！！急いで魔力を開放する。

【見つけた！そこで待っている！】

【わかった。早く・・・早く迎えに来て・・・】

最後のほうは自分でも情けないほどだと思った。

【・・・ああ、待っている】

そう言った後パタリと何も聞こえなくなった。それから急いで階段を駆け下り1階に着いたのか目の前には廊下が広がっていた。

私はそこも走っているとドン！という衝撃とともに目の前が真っ暗になり倒れそうになるところを誰かに支えられる。目の前が真っ暗になったのも誰かの胸の中にいるからだ。一瞬レクイが来てくれたんだと思って上を向いた。あれ？どこかであったような・・・あ！そうだ！！池であった人！！なんでここにいらっしゃるの？

## 第8話 攫われる（後書き）

次回に続きます。

念話・・・書いてある通りです。魔力に乗せて相手の心に語りかける魔法です。どうしてそれを最初に使わなかったかというところもものすごいテンパっていたからです。忘れていたんですよ！

## 第9話 攫われた理由

なんで・・・なんであの池にいた人がここにいるの？もしかして・・・もしかして私を攫ったのもこの人・・・？

「どうして・・・どうして貴女がここにいるんだい？・・・ま、まさか」

その人はなぜか青ざめたまま明後日の方向を向いて言った。さつきはどうしてここにいるんだって・・・まさかどういいうこ？ハッ！今はそれどころじゃない！！早くここから出なくちゃ！

そう思い私が振り返って走りだそうとしたとき手を握られた。イライラして振り向くと困ったような表情がそこにはあった。

「落ち着いてくれないか？貴女が焦って走ってもここからは出られません。ひとまず客室にガシャーン！！」

池にいた少年が話している時だった。言葉を遮るかのようになった音にびっくりして見るとそこには割れた窓ガラスのそばに魔物化したレクイがこちらを見て牙をむき出しにして立っていた。私はうれしくって駆け出し、抱きついた。

「ごめんね・・・」

『おまえのせいではないだろ？気にするな。』

いつもの、やさしい声にホっとして強張っていた体がどんどん解れ

ていった。

『さて、私の前から姫を連れ去った理由……聞かせてもらおうぞ。王子。』

私もそれが気になつて振りかえると右膝をつき右手を左胸につけて頭を下げている少年がいた。それを見てびっくりしてレクイを見ると目があつて後で説明すると念話が聞こえた。私はそれに頷いて少年のほうをまた見た。

「申し訳ございません。その……こちらの手違いと言いますか……」

最後らへんはぼそぼそと喋っていて聞き取れなかったけど手違いで私首の後ろ痛い思いしてレクイに心配かけちゃったってこと?!何それ!!

『手違い?』

その声にゾットした。とても低く地を這うような声……怒ってる……私が心配かけたときなんて比べ物にならないほどに。

「お待ちください。フェンリル様の使いの方。すべて私めが悪いのでございます。」

険悪の空気の中第三者の声が聞こえてそちらのほうに向くといつの間に集まったのか騎士たちが集まっていた。その中でも一番前に出てきて執事服のような服を着ている私と同年代くらいの少年が立っていた。

「すべて私がしたことです。そこにいるおられる王子、ランキ・シール・アトラス、そして私がアレス・ヘステリアと申します。昨日池から帰ってきたときから仕事に身が入っておられないのでこのままではだめだと判断いたしましたして調べてみたところ少女と会っていたことが判明しましたので少しでも仕事に身を入れてもらえたらとそちらにいらっしやる少女を連れてきてしまった次第です。なので王子は何も知りません。ですので責を負うのは私目でございます。」

言い終わって執事っぽい人は頭を下げた。

『ほう・・・その小童は知らぬと言うのか？部下を管理できる王子などいらぬのではないか？俺が協力してやろうか？』

レクイはニヤリと笑いながら言った。周りの人たちから息をのむ音が聞こえてきた。私もその言葉に背筋がぞくりと来た。だがここで私が引けば今のレクイならやるかねない・・・レクイには人を殺してほしくない！そりゃ私が知らないだけでレクイは人を殺してるかもしれない。だけど私がいる今は人を殺してほしくない。

そう思った私はいつの間にかに体が動いていた。

「待つて！！この人を殺さないで！！」

私が阻止するとは思わなかったのか目を見開いて驚愕した。

『な、なぜだミウ！！おまえを攫ったやつだぞ？！なぜおまえが止める！！』

興奮しているのか大きな声で言った。

「私は・・・私の目の前でもいないときでもレクイには人を殺してほしくないの・・・わがままだとは思ってる。だけどお願い！私は無事だから何もされてないからだから殺すなんて言わないで・・・」

私が目をうるうるさせながら言うとレクイはバツが悪そうな顔になって頷いてくれた。そのあとは割れた窓から外に出てその場所は後にした。

あの後今日は疲れたのと話をするために宿に戻った。さあ、どうしてこの国の王子が膝をつけてレクイと話していたのか聞かせてもらおうじゃないの！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0085ba/>

---

闇の歌姫

2012年1月10日01時46分発行